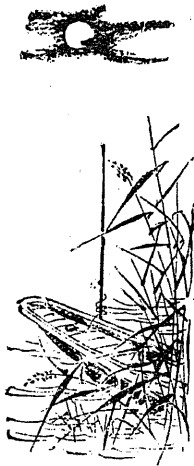


三つーでは水を汲みそめ四つーでは夜なべしそめ
 五つーでは糸をとりそめ六つーではこる機織りそ
 め七つーでは綾を織りそめ八つーでは屋敷ひろめ
 て九つーでは心定めて十ーでとのむをもーたーせ
 た十一ーで花の様なる御子をもーたせた十二ーで
 其のおー子のお宮まいりにや宮の下から。水がど
 んどーとと出ーてきて、其の水にや何を流をか赤
 ひ小袖をなーがしてまーつーは何を流をか黒
 ひ小袖をなーがしたひーはー一つき



六月(みなつき)

せく生



「みな月」とは、六月の昔の名である。今でも歌
 を詠む場合等には、矢張此の語を用ゑる者がある。
 何故六月が「みな月」といはれたか。其の譯は鎌倉
 時代の歌仙藤原清輔が、初めて二様に考へたので
 ある。一つは、此の月は農夫が事を爲盡した月即
 「みなしつき」であるから、其れを訛つて「みなつ
 き」といふのであるといひ、一つは此の月は年中で
 尤も暑くつて水の源が涸れ盡きて、田にも水が無

くなるといふみづなし月を詛つて「みなつき」といふのであると。

其の後の人々は大抵は皆後の説を信じて、字を

か」といふ通りであると新説を立てた。處が明治の御代になつて、又一つ奇抜の説が出て、水野秋彦先生のである。六月は炎熱

當てるにも「水無月」とのみ書いて、

焼く如き夏の真中で「眞夏月」と云つたのであつて其の「つ」の音が二つ重

なつて其の所謂古學派の牛耳をとつ

なつて居るのを一つ落して「みなつき」と云つた。其の證據は、昔の歌

た眞淵先生一派は、大に古語を研究

などを見ても「みな月」は皆直夏の事を咏であるのが一つ、又昔の朝臣に久

した結果、「水無月の説は何うも不可

我三夏橘三夏、藤原眞夏橘三冬藤原

水の無くなるのは八月であつて六月

眞冬等の人達が澤山あつて「みなつ

でない。六月を「みづ無月」と思ふは

つ「まなつ」の語が多く使はれたの

飛んでも無い僻事だ」と横槍を入れ

が分つたといふが、だといふのが、何うも卓見

て、雷の無い十月を雷無月といふ様

ではあるまいかと思ふのである。

に、六月は尤盛に鳴る月だから、雷鳴月である。

其の上下の「か」「ら」を落して「みな月」といふのである。雷を「かみ」といふ證據は雷丘を「かみを

である。雷を「かみ」といふ證據は雷丘を「かみを

山邊の赤人(萬葉集)

である。雷を「かみ」といふ證據は雷丘を「かみを

山邊の赤人(萬葉集)

である。雷を「かみ」といふ證據は雷丘を「かみを

山邊の赤人(萬葉集)



不盡巔により置く雪は六月の

十五日に消ゆれば其の夜ふりけり

柿の本人磨(全集)

六月の土さへ割けて照日にも

吾が袖乾めや君にわはずして

凡河内躬恒、みな月のつごもの日よめる

夏と秋と行きかふ空の通ひぢは

片方涼しき風やふくらん(古今集)

全じ人

みな月の河邊のはらへ小夜更けて

だもとに秋の風かよふなり

序にいひたいのは、六月の異名に涼暮月、松風

月、風待月、鳴電月、常夏月などあるとである。

風吹けは池に波よるいつみなる

すゝくれ月の頃にもこそなれ

雲たかみわめふり山のけふよりは

まつかせ月の夕暮そふる(莫傳抄)

松かげに床居をしつゝけふははや

風待月の夏のうとさよ(顯昭)

夕立は猶はれやらでなる神の

月にもなりぬ夏の暮るらむ(定家)

ありはらひいにも見せんとこなつの

月まちえたる花のさかりを

(御製)

米國に於ける我が二人の女學生

これ米國ホストン、サンテアグロープに記載せるを譯したるもの、即ち一人は井口あぐり嬢、他の一人は牧野清嬢なり。共に我が女子高等師範學校卒業生にして、當時彼地に留學研究

せられつゝあるなり。一日該新聞記者二嬢を其の寓に訪ひし時の對話を書きたるものにして、其の肖像もともに立派に掲げられ居たり、今之をこゝに寫すを得ざるは大に遺憾とする處なり

譯者 や、て、

記者其の表題として。二嬢の肖像を掲げて曰く

遠く故山に便りなき姉妹の爲めに、我がポストンに留學せる東洋二婦人の肖像（井口氏は和裝、牧野氏は洋裝）

井口あぐり女史はポストン体操師範學校に在りて體育科研究中、牧野清子嬢は、インスチチュート、オヴ、テクノロジ―に於て生物學修業中なり

共に我が亞米利加を賞賛して止まざれども、尙は歸りて、其の教育に任ぜんとする故國交友を思ふの情頗る切なるを見るべし

と、更に本題に入りて井口嬢を紹介すらく

今冬當市に東京より二人の日本婦人の來往せるあり、何れも遠き故郷の教育に盡す所あらんとて、今や特殊の學科を修業しつゝあり、

井口あぐり嬢は、故マリー、ヘメンウカー女史の創立せし、ポストン体操師範學校に在りて、其のメルニクビルディングに寄宿す

目下嬢は本校の二年級なり、其の入學前一ヶ年間スミスカレッヂに於て研究せしなり、嬢は其の在郷中已に体操及體育學につき頗る研究する所ありしが、更に一層の研修をなさんとてハンテングトンアヴェ枝出身の體育學のドクトル、ペレンセン嬢の紹介に由り今回當校に入學せられしなり

と次々に其の對話を記して曰く
嬢は可笑しげなる呷れる英語にて

只今日本にては女子の躰育につき八釜敷ござ
います、それで政府では其の体育法につき研
究せよとて私が指命されまして當地に留學す
る事になりました、

私は東京女子高等師範學校で教育されました
が、此の學校はこちらのカレッジ位に相當す
るのです、其所を卒業しましてから五年間の
義務年限と云ふがありますから政府の指定で
初めは其の學校に居まして、次に地方の私立
高智女學校に奉職し又もとの學校に轉任しま
した、

其の中に政府からこちらに留學する様に指命
がありましたのです、それから私は先づノル
ダムブシヨンに參りました、其處には私の先
生で東京に居らるゝ方と御存じの貴婦人があ

りますので、私は其方と同居して英語を修む
る便利がありましたからです、日本からは直
ちにシヤトル市につきまして、次にウオシエ
に參りバンクーバーで私の朋友など、面會致
しました、

參りました當時は萬事なれませず心細くも感
じましたが、御國の人たちは大變御親切にし
て下さるものですから、早や此の夏などはニ
ユトハムブシャーのジャフリーやメインのフ
レーベルグ、エーグル島などで實に愉快に暮
らしました、只今では多少英語に馴れまして
ポストンは誠に住ひよい處だと思ふて居りま
す

學校では最初に私に家庭教師をつけて呉れま
したか、直ちに皆さんに追付く事が出来まし

て、只今では皆様のやる事はどうかやら出来る様になりまして、ローブ（繩）を用ふる体操ならん）も半分位は出来ず、私は元から体操は大好ですから東京に歸つたら体操の教授が出来ると思つて喜んで居ります。

私は女子高等師範にまゐつて体育學を教へ日本女子の体力を進むる積りであります

記者筆を一轉して曰く

長く未婚の婦人として男子の助けを受くるなく獨立して種々の事業に盡粹せんとする女子に關し日本に於ける状態を問ひたるに

左様日本では女子が獨身で暮らすと云ふは極々稀で一般に奇態に思ふて居ります、私の國では女子は遅くも廿歳普通は十六歳で結婚します

廿五歳位でまづ縁づかぬ婦人は先づ一年寄りの賣残りの様に思はれます御國で云ふニユー・ウーマン（一生結婚せざる婦人）と申す様なものはありません

そして私の國では女子が獨立して業務にあたりましても自分で生活致すと云ふばかりで結婚しました女子と全く同じ様な仕事を致して居ります

と更に曰く

嬢は故郷戀しげなる調子にて猶話をつゝけて私の母は極昔かたぎの人ですから私が此の年まで獨身で居るのを奇態に思つて居りますが父の方は只今國學の教師などをしてありますだけ、自然當今の事情にも通してゐますから餘り不思議とも思ひませんです

わたくしは兄弟は男三人女三人でございますが遙々此方に參つてをりますれば時々は堪え難き情にうたるゝ事がござります

と云ひさして懐郷無限の念を抑へんとしたりしが如くにて

アなんです、國の 兩陛下の御眞影を御目にかけてませう、御覽なさい御二方とも御洋装で御出になります、チーツ此方の方其のまゝでせう

と云ひたる嬢の和服の如何にも似合へると其の隔意なき嬢が應接とは思はずも「イヤ貴嬢は日本服で如何にも立派に見えられますよ」と一言口すべりに、嬢はさも愉快氣に

ソーデスカ私は女學生用にと思ふて作つた日本服を持って居ります、若し御望みならば一

重ね差上げませう、着物ばかりか何も蚊も私には只今ではほんの亞米利加人ですから和服は不用です

記者終りに筆を加へて曰く

嬢の寓所は學校の傍なる閑裕なる所にして、室内の裝飾より日常の器具に至るまで、日本皇室の寫眞を除きては、凡べて其の同窓學生と少しも違はざるなり、先づ亞米利加に於ける普通の生活なれども、其の優美にして雅致あり閑裕にして爽快なる點に於ては古代羅馬の諺を知るや知らずや、兎に角確かに其の眞意を得たるもの如し

と余は本號をこゝにといめ、更に次號に於て牧野清子嬢を紹介せん。

結婚論 (承前)

野本生譯

予は、又、世の青年男兒が、人世の或る一節點に到達する迄は、全く、彼等に求婚の權利なきものと思ふ。即ち、其の年齢、及び目的に關する或る一段落に到達するに至る迄は、未だ妻を娶るの權利なきものと思ふのである。年齢に就いていへば、青年は、少くとも廿五歳に達する迄は、結婚を見合はせねばならぬ。青年此の期に達せざれば、意思定まらず、心は常に浮動して止まない。此故に、彼等は、あらゆる事を成さんとて、凡べの方面に漂泊流轉して徒らに煩悶する。彼等は浮世と浮世の人々の如何なるものであるかを心得ずして、而も、自らは、何事も能く會得して居るかのやうに思ふて居る、處が、其の實、全く會

得して居らないので、是れは、十八歳より、廿五歳迄の青年の陥り易き誤解である、而して、齡廿五に達し、或は之れを超ゆるに至れば、其の以前に知れる事、又、心得たりし事の如何ばかり、狭小なりしかに心付くのである。然れば、人は廿五歳を超えて後始めて、事物の何たるを學び得るので、彼等は、此時より漸く、凡べての事物に對して、能く其の眞意を解するやうになるのである。要するに、廿五歳前は、己れは、他人々よりも一層能く物事を辨へ、能く心得て居つて、一廉に成人してゐると信じて居るが、廿五歳を超れば其の知れる所の、極めて偏狹にして、自分は未だ一箇の不完全なるものに過ぎないといふ事に思ひ到るのである。青年、此期に達すれば、彼等が、從來の知見の、極めて些少なりしに驚きて、更に

事物の研究に志すやうになるのである。丁年前後の青年には、己れ能く女子を知れりと信じ、輕卒に妻を擇ばんとするものが多い。然れど、丁年前後の動靜常ならざる彼等の意思は斯かる問題に關與すること猶危険多ければ、予は決して、これに觸れざらんことを忠告する。青年又此の期に達せざれば、自己の能力を知る事能はず、心中不變の目的なく、又、己が能力の果して何等に適するやを知らず、世務機運の如何なるものなるやを心得ず、猶又、彼等は、己が能力の、更らに、優等なる地位に適するや否やを、其の主人、先輩に示すの機會をもたない。此故に、其の企圖するところのものは、毫も實際的觀念に伴ふて居らない。即ち、何事も、實際に形成する事が出来ないのである。廿歳より廿五歳迄の時期は、彼等が、世に出

づる準備の時代で、此間は、彼等自己一身の經營辛苦に對するより他に餘分の責任を負はないやうにするのがよい。然れど、齡廿五に達すれば、彼等の心意、漸く、定まり、人、其の言ふ所に始めて、耳を傾くるに至り、曾ては、一顧の勞をも拂はれざりし身も、今は、明かに他の注意するところとなるのである。彼等は、是に至りて、始めて人生の道程に上げるといふべきもので、深思熟慮の末、己が生涯の伴侶となるべき妻を娶るべきや否やを決するは亦正に此時期である。人、若し、世に出で、何事をか成さんと思はゞ、廿五歳より廿歳迄の間は、大に、其の能力を試みなくてはならぬ、此故に、善良なる妻女の慰藉と助言とは彼等にとりて、極めて必要となるのである。一般の統計によるも、我國の青年は廿五歳より廿歳迄

の間に結婚するもの多く（約七分）年齢の若さに従つて少くなつて居ることが分る。數年前迄は是れと違つて、其の結婚年齢は、多く、廿歳より廿五歳迄の間であつたのである。

然れど、又、同時に、妻を娶ることの晩きに過ぐるも亦宜敷ない。此處に晩きに過ぐるとは、齡卅以上をいふので、人、齡卅を超ゆれば、獨居の性癖慣習固着して年を経るに従ひ、愈々抜き難きに至り遂に妻を娶ることの却て困難なるを覺ふるに至るであらう。何となれば、結婚は、女子が之によりて女兒的快樂を犠牲に供すると同じく、男子にとりても亦多少の讓歩を要求する事勿論にして兩者豫め此の覺悟なくてはならぬからである。此故に結婚は或種の人々の思ふか如き輕くしきものではない。結婚はなぐさみ半分のものでなき

のみならず、又單に結婚の爲めに結婚すべきものでもない、人若し、結婚せんが爲めに結婚するかもしくは、齡を経つて來るからといふので以て結婚するのならば、寧ろしない方がよいのである。

要するに、青年諸士は意中の女子に逢着するに至るまでは結婚すべきものでない。斯は、以上所論の全部に貫徹せる唯一安全の法則なので、女子と年齢とに關する凡べての疑問は是れによりて決することが出来る。然れど、出來得べくんば、廿歳未滿の女子と婚することを避けよ。而して、諸士も亦、廿五歳未滿にして妻帯することをやめよ。許嫁に關しては、予は其の時期の可成丈短きかよいと思ふ、尤も許嫁に就いては、其の當人等の便宜、事情等の爲め一概に論ずることは出來ない

然れど、一般に人々は、許嫁を爲すこと、餘りに早く、從つて、結婚に到るの道程遠きが爲め其の間永く心を惱ますものが甚だ多い、此故に予は、彼等が相識の時期を長くして、許嫁の間を短くすれば、諸事都合よく運ぶであらふとおもふ許嫁の時期を長くするは決して褒めたことでない斯は、何れの方面よりするも甚だ不都合な事で、寧ろ、許嫁に先づ相識の時期を永くするのが遙によいのである。男女相互に相識ることの極めて、肝要なるに不拘、世の男兒にして、能く、其の女子を知りて後、是れを娶るもの果して幾人あるであらう、又、世の女兒にして、深く、其の男子を識りて後、是れと婚するもの果して幾人あらうか。(未完)

寡婦と愛子

(アー井ンゴ) (承前)

一 一一 三 生

嬉しいのと、悲しいのとが交々混つて居る此再會の詳しい事は別に述べませぬ、とにかく、若者は生きて還つて來ました、家に歸つて來ました、で老母の心を慰め、老母の身を養ふべき望を與へて共に住む事が出來た、しかし惜しき事には彼の氣力は全く盡きました例へ一縷の望みがあるにしても家のかく頽廢したのを見ても、運命を斷ちて死なぬ事はないのでありました、「ジョージ」は尊の上に身を横にした儘老母が夜通しの看護のしるしもなく一度も、枕を上げず、哀れ黄泉の客となりました。

村の人は、「ジョージ、ソーマース」の歸つたのを聞いて、各々訪問に行きました、皆思ひく

心を盡して、出來得る限り慰めやうとしました、
 が彼は身軀が弱つて、口も聞けませんで、唯眼に
 感謝の色を浮べるのみでした、彼の母は、常に其
 側に居つて、子も亦他人の手に助けらるゝのを望
 まないやうてした。

人と言ふ者は病氣で、枕に附いて居る時は、日
 頃の大人の心も無くなつて、涙も脆くなり、小兒
 心に返るものであります、故に年の老いた身でも
 病氣と失望に苦しんで居る時、殊に自分は他國の
 空にあつて、關ひ手も無く獨り淋しく、病の床に
 呻めく時などは、誰でも思ひ出すのは、幼い身を
 種々に看守つて、枕を直して下されたり、わが爲
 に愛撫を身に垂れ給ふた母親の慈悲であります、
 實に母親の子に對する愛情と言ふ者は、他のもの
 愛情に勝つて、長く續く者であつて、子が吾儘

をしても心では叱る事はなく、子の爲には如何な
 る危険でも犯さうとしましたり、よしんば、我子
 が愚かな者であつても、母の慈悲は弱めらるゝ事
 はありません、亦子の不幸の爲に亂さるゝと言ふ
 事もありません、子の便利の爲には、如何なる樂
 しみも犠牲にし、我子の名譽や榮華を共に喜び、
 若し不幸が子の身に襲ふても母の愛情は益々加は
 つて來ます、又子に耻辱が掛つても、猶可愛がり
 世間の人から、我子が捨てられたやうに、爪弾き
 せられても、猶母の心は同じで、嬉しいと、悲し
 いとを、共にして居るのであります。

此哀れな「ジョージ、シーマース」も他郷の空に
 居まして病にかゝり、誰も介抱する者なく、淋し
 く獄に繋がれて居た境遇の果敢なかつたを、つく
 く身にしみて覺えましたから、今は一瞬時たり

とも、母を枕邊に置いて其處から離す事を忍びま

せんでしたで、母親が立つと何地へ行くのだらう

と力ない眼を見詰めて居るのを見て可愛想にと、

母親はちつと我子のすや〜と眠つて居るのを看

病して居ると、時々我子が何か夢に襲はれて、醒

めて氣遣し相に、四周を見廻して母親が枕許に俯

伏いて居る姿を見ますと、子は母の手を自分の

胸に當て、子供の様に、すや〜と眠に就きました

た、こんな有様で、あはれ此子の此世の息と言ふ

者は絶えて到々死の神の手に導かれて天國に行き

ました。

わたしは此酸鼻の話聞いて、すぐ此あはれな寡婦

を尋ねて金錢を恵み、尙其心を慰めやうと思つた

が、村の人が出來得る限り色々世話をして居ると

言ふ事を聞いたから、その儘に控へて、入らぬ世

話はしまいと思つた。

次の日曜日、私は寺へ行つて見ると、思ひが

けず、彼の老母が、ひよる〜しながら、神壇の

階の所に坐つて居るのを見ました。

見れば老母は喪服を着て居ました貧亡人の悲し

さには、子を思ふ情は深くあつても、思ふまゝに

粧ふ事は出來ませんでした、黒い「リボン」色の襦

めた手巾其他こんな様の者が二つ三つ、無限の悲

を、僅な物で表さうと勤めて居たのが、見るから

氣の毒でした、そこで私は富人の墓や、長文句の

碑文や、物言はぬ大理石の石塔などを見まして、

眞心を籠めて神壇の所に祈禱を捧げて居る、この

哀れな老母の、生きた哀悼の様子と言ふものが、

眞の價値あるやうに思はれました。

私は、此話を、此寺に會集して居る富人に話し

ました所が皆心を動しました、そして、老母の生計や、苦悶を、助けやうと骨折つて呉れましたけれど、日曜日は一二度巡つて来る中に、彼の老母の姿は、此寺の何時も座る席には見えませんでした、聞けば老母は可愛らしい子の行つて居る天國をさして長い旅路に赴いたとの事で、これからは老母もいとしい友と再び別れる事の無い身となりましたのであります。

(完)

鐘馗の幟

秩 溪 生

三四才の小供が泣くと、「鐘馗様ならぬらめすよ……床の間を御覽」と嚇すとは、昔朝鮮の親達が、『鬼將軍來』をもち出したのと同じであります。前に嚇された覚えの有つた子でもありません。六つ七つに見えるのと、十ばかりのと二人、

遊びに来て、弟小父さん、彼の幟の鐘馗様は、何ういふ人？、是何處の人？、とやたらに尋ねますので、私は次の話をして聞かせた事でありま

昔々支那で唐といひました時、玄宗皇帝といふ天子様がありました。或る日、多くの兵隊を引連れ、大將方を指圖せられて、驪山といふ山の近所で、戦争の演習をなされました、其の日は、合惡に薄暗い程曇つて、細かい雨が降りまして、餘程悪い天氣でありました。皇帝は演習がすむと、すぐ御乗物で御殿に御還りになりました、御還りにはなりませんが、其の時から何うも御氣分が宜くない、到頭煩ひ付かれました、瘡といふ御病氣になつて、一日置きに熱が高くなりまして、其の時の御苦みといつては、一通りや二通りの事ではあ

りませんでした。或る日の事、大相御腦みの後す
 や／＼と御眠になりました處が……虎の皮の襖
 鼻褌を着けた、一匹の小さい赤鬼が飛び出て、片足
 に草履を穿き、片足は跣足で腰に其の草履が吊し
 てある。團扇も一本搯してある、皇帝は、見ると
 自分が可愛がつて居る御后様「楊貴妃」の香囊と、
 自分が大切に置いて置いた笛を盗み出して、廣い御
 殿を駆け回はり、皇帝の御前で戯けかへつて跳て
 居る。皇こりや何物だ『鬼、魍魎といふが私です』
 皇虚耗、何だ其な物が『鬼虚空を飛び行き人の
 物を盗るから、魍魎、人の嬉しい事を耗らし盡つて
 悲しがらせるから、魍魎、虚耗々々、魍魎です』
 皇帝は火の様な御立腹、誰か呼ぼうとするより早
 く、一人の大男がぬつと現れた、頭には大きな破
 れ帽子を冠り、大きな身軀に緑の上衣、革帶をし

め長靴を穿いて居た。何うするかと見ると行きな
 り彼の赤鬼を引吊した、眼球を刳つた、到頭引裂
 いて仕舞つた。皇、やあ其の方は何物だ『大男』は
 い私は終南山の進士で鐘馗と申す者であります、
 と跪いた。皇帝「何で茲へ来た？ 鐘馗は官吏
 志願で、先年此都へ来て進士試験を受けました、
 幾度受けても上れませんが、據所なく故郷に歸りま
 した。餘り口惜しく羞しいので、石に頭を叩き付
 けて死んだのであります。處が陛下の御恩命は實
 に特別であつて、此の上衣を下されて進士にもな
 されて官吏と同格に葬式までもして戴きました。
 其の御厚恩寸時も忘れは致しません、日夜奮勵し
 て陛下の爲に、天下中の鬼共化物の類を根絶しに
 する覚悟であります。』と言つたと思ふと目が締め
 て皇帝は汗びつしより。其れで瘧疾はすつかり癒

りましたとぞ。

弟「あわ怖い人」 兄「怖い夢だつた」 兄「謙小父さん最早それだけなの」

あわ尙有りましたよ。皇帝は其れから早速吳道子といふ畫家を御召になりまして、夢の通に鐘馗をかけと仰付けられました。道子は一々御話を承り、謹で御受けをしまして、御前を引退り、筆を採つて紙に向ひますと、心持ちが恍然として來て其處に畫かうとする鐘馗があり〜と見えて來た其處で筆を走らせて立處に出來上つたすぐに、其れを上りました處が、皇帝は熟々御覽になつた。卓子を叩いて、「汝も朕と同じ夢を見たの?、と仰せられて大相御氣に入りで金貨百枚を下されたと申します。其の繪が實に彼の幟なんどの繪の御先祖なのであります。

弟「何うして幟に書くんだらう」
 魔物を退治るからです。
 兄「魔除けだ〜」

あやめ草

根にあらばるゝ

今日こそは

いつかご待ちし

甲斐もありけれ

(東三條院)